様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　21　年　6　月　18　日現在

研究種目：若手研究(B)
研究期間：2007～2008
課題番号：19700660
研究課題名（和文）　進路決定支援のためのユーザ適応型大学評価情報検索システムの構築
研究課題名（英文）　Building a University Evaluation Information’s Search System for Senior High School Students

研究代表者
齋藤聖子（SAITO KIYOKO）
独立行政法人大学評価・学位授与機構　・　評価研究部　・　准教授
研究者番号：90443283

研究成果の概要：本研究では、第一に大学情報の有用性に対する認識について大学関係者と高校関係者を対象に調査・分析を行った。その結果、両者に認識について大きなギャップが存在するといえた。ギャップは主に以下の点であった。⑴大学関係者は「大学」の場は教員主導の環境づくりを重要視していたが、高校関係者は学生主導の場として考えていた。⑵大学関係者は短期的な教育結果を簡便的に示すことが重要であると認識していた。一方、高校関係者は短期的な結果より就職してからの活躍や就職してから役に立つ基礎的能力を身につけられる環境について重要視しており、長期的な視野にたった情報を求めていることがわかった。調査結果から、高校業界のニーズにマッチした大学情報の発信システムの雛形を構築した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	2,100,000 円	0 円	2,100,000 円
２００８年度	1,200,000 円	360,000 円	1,560,000 円
年度			
年度			
年度			
総　計	3,300,000 円	360,000 円	3,660,000 円

研究分野：大学評価研究、認知心理学
科研費の分科・細目：科学教育・教育工学・教育工学
キーワード：メンタルモデル的アプローチ、大学評価情報、ギャップ分析、学習成果、学習プロセス、エビデンス

１．研究開始当初の背景
現在実施されている認証評価の目的のうち「大学等の教育活動の改善に資する」かつ「評価結果を公表して社会からの理解と支援を得る」ことを目的として行われている。大学設置基準の「大綱化」以来、各大学の「評価」への意識も高まり、「大学等の教育活動の改善に資する」ための評価枠組みや手法の研究、つまり「評価の実施」についての研究は数多く行われるようになってきた。しかし、一方で、「評価結果を公表して社会からの理解と支援を得る」ための方策、つまり「評価実施後」についての研究は行われていないのが現状である。本研究ではこの点に注目し、評価実施後の、効果的な情報公開や発信に焦点をあてた。

２．研究の目的
本研究では高校関係者が考える重要な大学情報と大学関係者が考える高校にとって重要な大学情報について調査・分析を行い、その結果から高校関係者にとって重要な大学情報が検索できるシステムの構築を行う。

３．研究の方法
3-1.　ヒアリング調査

対象　調査対象は全国の国公私立の高等学校からランダムに抽出し、調査に承諾を得た高等学校の教員 22 名と、全国の国公私立の大学の高校関係者との接触の機会が多い大学教職員 21 名を対象とした。
調査手法
本研究では、よりリアルなニーズ分析を目的としているため、新しいニーズの抽出を行うために効果的なメンタルモデルアプローチを適用した[7]。メンタルモデルアプローチとは、実験者により事前に質問項目を規定することにより、実験者が事前に想定できない新しい概念を抽出することが困難となる質問紙調査の問題点を回避することを目的とした手法である。メンタルモデル的アプローチでは、１対１の非構造化面接により得たプロトコルをもとにメンタルモデルを構築していく。

非構造化面接項目
高校関係者が重要と考える大学評価情報を面接のテーマとし、本調査では高校関係者とは、高校生、保護者、高校教員とした。参加者には「あなたが考える、重要な大学評価情報とは何ですか、自由に考えていることを話してください。また、あなたが進路指導や、面接を通して把握している、保護者にとって、または高校生にとって重要な大学評価情報とは何かについても話してください」として、自由回答を求めた。実験者は参加者が新しい概念や、言葉を発話した時のみ、その意味や、定義の確認を行った。

手続き
面接は、面接者と被験者（面接対象者）の 2 名で行う。また、事前に参加者に許可を得て、ＩＣレコーダで回答内容の録音を行った。また、面接者は被験者の発話文脈の記録を行った。参加者のプロトコルは全て分析対象とした。

分析方法
発話単位は基本的に発話プロトコルを一文単位で区切ったものとした。しかし、発話文脈の記録を手がかりとし、一文中で「間」(2 秒以上のポーズ)、発話相手の変化がみられたときは、そこで分割した。カテゴリー分析では、発話単位ごとに２名の研究者が独立にカテゴリー分析を行った。判定一致率は 76%～84.2％であり、判定不一致があったものについては協議により決定した。

3-2. 質問紙調査
対象　調査対象は全国の国公私立の高等学校と大学で、回答があった高等学校 1945 校（公 1436, 国 7, 私 486)、大学は 770 校(公 86,国 137, 私 543）であった。
調査手法　本調査では 3-1 で行った分析結果で、抽出された重要な大学評価情報の主な要因をもとに質問紙項目を作成、郵送、分析、ヒアリング調査の分析結果の妥当性の検証を行った。
3-3. システムの雛形の構築
3-1,3-2 において明らかになった高校関係者が重要と考える項目を検索できる大学情報検索システムの雛形を構築した。

４．研究成果
大学が考える「高校関係者にとってニーズの高い情報」は教育の質・卒業までに得られる資格・就職・施設、設備であった。一方、高校関係者が考えるニーズの高い情報とは教育環境・入試難易度・卒業生による大学の評判・就職であった。大学と高校の認識が一致した項目は「教育の質」「就職」、「資格」「施設・設備」であった。各項目について得たヒアリンツ調査について詳しく考察する。
「教育の質」
多くの大学は自大学が教育の質の高さを備えている説明として、少人数教育の実践(64.2%)と教員の質の高さ(41.8%)を挙げた。一方、高校関係者にとっての教育の質の高さとは、学生同士の切磋琢磨を通して自律的に能力を伸ばせる環境を意味していた。また、教員の質を求めた高校教員は全体の 15.8%、少人数教育については 20.3%に留まり、学生同士の学問的交流の質の高さを重要視した。少人数教育を特色とする大学でも、クラス編成は少人数だが、教員が強制的にゼミのプロジェクトテーマを決定し、学生は単位取得のために分担作業を行って義務的にレポートを提出する実態がある場合は非常に低い評価が行われていた。反対に、大人数講義制を主にとってはいるが、学生が自主的に運営する研究サークルが活発に行われている大学は高い評価が行われていた。このことからも、大学が強調する「少人数教育」は学生同士の切磋琢磨による自律的な能力の開発、伸長という目的達成ための一つの手段に過ぎず、形式的に環境が整備されていても意味が低いといえる。また、教員は学生同士の自律的交流を支援する脇役であり、特色として前面に押し出す主役ではないということが、高校の「教員の質の高さ」への言及の少なさから分かる。
「就職」
大部分の大学が就職率（89.3%)、大企業への就職率(64.8%)を特色として挙げた。一方就職率を上げた高校は 34.1%であり、大企業への就職率は 32.3%であった。就職について高校が最も重要視していたのは就職してからの満足感(51.3%)であった。大学が大企業への就職が重要であるとした理由を、最近の高校生と保護者のブランド志向を挙げた。一方、高校は大企業への就職を挙げた理由として、ブランド志向は保護者のみであり、高校教員は大企業へ就職できても、その後職場での能

力を発揮し活躍できなければ意味がないと考えてた。大事なのは企業名ではなく、各学生の適正にあった企業に就職できることが大事であり、そのためには学生が職場で十分に活躍できる能力を卒業までに身に付けられる環境が大学に整備されていることが最も重要であると考えていることが分かった。また、その点を説明すると保護者は理解し、大企業への就職には拘らなくなると高校教員は考え、高校生は就職については全く大学選択の際に考慮していなかった。

「資格」

大学は卒業時までに取得できる資格取得種類数の多さと資格取得率の高さが高校にとって重要であると認識していた(38.2%)。資格種類数の多さは大学がカリキュラムのバラエティーの高さ、資格取得率の高さは大学の学生へのサポート厚いことの証明であると考えていた。一方高校は資格についてある程度は重要視していたが(12.4%)、資格でも医・歯・薬・獣の取得のみに関心があることがわかった。高校は医・歯・薬・獣の資格取得はその後の「医師」という職業選択を確実にし、将来の人生設計が確実にはならないそれ以外の資格については意味が低いと考えていることが分かった。また、資格種類数の多さの強調は、かえってバーゲン会場の様な安売り感を与え、カリキュラム構成へのポリシーのなさを高校に印象づけているといえた。この印象を払拭するためには、取得可能な資格について、卒業後の学生の人生に有用である根拠を大学は説明する必要があると考えられた。

「施設・設備」

大学のとっての設備・施設の質の高さで多く挙げられたのは、学問分野では図書館の充実度、生活分野では学生食堂、トイレの清潔度であった。図書館の充実度では開館時間の長さと蔵書の充実度（数、種類）が強調される傾向にあった。また、トイレや学生食堂ではいわゆる「おしゃれな」雰囲気を学生は好むと大学は考えていた。一方高校からは図書館に関する言及は若干数みられましたが、生活面での「おしゃれ」な雰囲気に対する言及は 1 ケースしかみられなかった。複数の高校が言及した点は理工系の実験施設・設備についてだった。いくつかの大学は実験施設・設備が最先端であることを強調はしていたが、高校では施設・設備の質の高さよりそれらを学生が活発に使用できるシステムであるかを重要視していた。実験施設・設備は学生がその活用により特定の能力を身につけるためのツールに過ぎず、機能してなければ意味が低いと高校は考えていた。

「入試難易度」

入試難易度については、多くの大学は現状より上昇することは非常に困難で、維持または下降することを防ぐ努力をしていると回答した。また、入試難易度の高い大学への合格を固執するブランド校ブーム、いわゆる「偏差値神話」について多くの大学が苦慮し、高校は入試難易度のみで大学選択を行うのではなく大学の特色をもっと考慮して欲しいと考えていた。一方高校の「偏差値」に対する認識は、3 種類に大別された。「ブランド名への執着」「学生の質の高さ」「宣伝力」である。「ブランド名への執着」は、大学が考える「偏差値神話」に類似した意識だった。しかし、ブランド名への執着の理由として、多くの大学は現代の高校生のブランド意識の高さを挙げたが、高校は、高校生が執着するのではなく、保護者が執着するとした。つまり、高校生が「偏差値」を気にするのは、高校生が入学志望大学の受験を保護者へ説明する際、ブランド価値が高い大学の方が賛成を得られやすいと考えているためであるといえる。次に、「学生の質の高さ」ですが、高校は「偏差値の高い大学」は選抜された優秀な学生が入学するため、大学生活を自律的に充実させることができ、また、学生同士の質の高い活発な交流により学生の能力が相乗作用的に引き上げられると考えている。

つまり、「偏差値」の高い大学には能力的にも精神的にも活発な学生が在籍していると考えているため、「偏差値」が重要と高校は考えている。3 点目の「宣伝力」については、宣伝とは大学による宣伝ではなく、在学生による宣伝を意味している。多くの大学生は出身高校の後輩に在籍している大学について話す機会を多く持つ。この際、「偏差値」の高い大学に在籍している大学生は、大学の良さを自律的に発見し、それを分かりやすく後輩に伝える能力を身につけており、在籍大学の魅力を非常に効果的に伝えることができる。そのため、話しを聞いた多くの高校生がその大学を志望し、選抜された優秀な高校生がその大学に入学し、またその優秀な学生が後輩にその大学を更に魅力的に話し・・と宣伝の好サイクルから結果的にその大学の入学難易度は更に上昇する、と高校は認識していることが分かった。

「卒業生による大学の評判」

多くの高校は大学情報のリソースとして卒業生からの情報を重要視していた(62.4%)。大学 1～2 年生の長期の休みに出身高校の部活指導などに戻り、後輩に大学生活の話しするケースが多いといえる。後輩も雑談を通してフランクに先輩に大学生活の様子を聞き、将来の自分の大学生活をよりリアルに想像できるようになる。大学の教員や職員による説明より学生の目線から捉えた大学の様子は非常に有用な情報をなりうると高校は考えていた。この様な機械を通して卒業生による情報と大学が行った説明と異なると、その

大学の評価は非常に低くなる。例えば、前述した最先端の実験設備・施設があっても実際には学生は使用できず意味がないといった実情も、この様な卒業生による「口コミ」により多くは判明する。また高校生は冷静に先輩の成長の様子を観察しています。話しを魅力的に創っても、先輩自身が魅力的でなければ効果は低く、多くの大学が行う大学大使のような、大学が学生に大学の宣伝文句を教え、出身高校に宣伝に出向かせても、彼ら自身の様子からすぐに宣伝なのか事実なのか判ってしまうのである。

考察

各項目の分析結果から、大学と高校の認識の違いは主に３点あるといえる。まず、第一には大学の「教職員」重視主義と高校の「学生」重視主義の違いである。大学の回答の多くは「我が大学は先生と職員が一体となって・・・」と主語が大学運営者でした。反対に高校の回答の主語の多くは学生であった。大学は、大学とは教職員が主導で学生を導く場であるとの意識が高いが、高校は、大学とは学生が自律的に過ごす場であると捉えており、教職員の指導力について重要視していなかった。

第二に、大学の「結果」重視主義と高校の「プロセス」重視主義の違いである。大学は資格取得数の多さや就職率の高さ、図書館の蔵書数・開館時間など、数字で表現しやすい「結果」を提示してきた。反対に、高校は就職できたことの「結果」より、職場で活躍できる能力が育成されているかの教育の「プロセス」、少人数教育が実践されている「結果」より、その教育を通して実際に学生の能力が育成されているかの教育の「プロセス」を重要視していた。

第三には大学の「ハード面」重視主義と高校の「ソフト面」重視主義の違いである。大学は、少人数教育体制の充実や学生食堂のきれいさ、大学大使の実施など、インフラが整備されているかを重要視しています。しかし高校はそのインフラが実際に学生のために機能しているかを重要視していた。

これらの結果から大学は「結果」が重要であると考えるあまり、インフラ整備や、〇〇センターの新設など、いわゆる「箱物」経営を過大評価し、その情報を強調して発信している傾向があるといえる。しかし、その情報を受信する側の高校はその「箱物」が学生の能力を伸ばすという真の目的を達成するための物なのか、ただのみせかけなのかを冷静にあらゆる角度から分析、評価している。反対にいえば、学生の能力を伸ばす取り組みはすぐに結果が出る場合と出ない場合とあることを高校はよく把握しており、すぐにその結果がみえなくても、そのプロセスに納得できる目的や根拠が存在すれば、その取り組みを高く評価しています。「外見」より「中身」であるといえた。

質問紙調査の結果、上記の分析結果は妥当性があると検証された。

3-3.システムの雛形の構築

3-1.3-2　の分析結果から高校への効果的な発信は以下の２点が重要であると考え、システムのフレームに活用した。

⑴学生がもたらす情報が最も信頼性の高い情報であると高校関係者から認識されていることから、学生が自律的に大学生活を創造しながら、それを体感し、そのプロセスを後輩である高校生に説明できる環境を整える。

⑵学習プロセスを高校関係者が重要視していることから、学習成果とその獲得プロセスの関係性を明確にし、教育プロセスが機能していることを発信する。

⑶教育内容の記載を教員主導型から学生主体型に改良する。

また更に、常にリアルな教育情報を発信するために、以下の点をシステムに組み込んだ。

⑶全教員が上記の点を把握しながら現場の教育プロセスに活用していることを明記する

⑷全学生が上記の点を満たした情報を意識できる環境を整備する。

⑸よりリアルな情報を発信するため、全教員が常に教育情報を更新．発信できる環境を整備する。

上記の点を満たしたシステムの雛形を構築した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　２　件）

① 齋藤聖子,大学評価情報の効果的な発信とは,大学評価・学位研究, 7, 73-84,2008, 査読有,

② Kiyoko Saito, Impact of QA to the Senior High School Students, Proceedings of INQUAAHE 2007 Conference, 2007, 査読有

〔学会発表〕（計　３　件）

① Kiyoko Saito, Impact of QA to the Senior High School Students, 2007, INQUAAHE, 2007.4, Tronto

② 齋藤聖子，大学評価情報の社会的インパクトについて, 大学教育学会, 2007.6, 東京農工大学

③ 齋藤聖子, 教育戦略可視型シラバス作成支援システムの構築, 大学教育学会, 2009.6. 首都東京大学

〔図書〕（計　1　件）
齋藤聖子,ぎょうせい,大学評価文化の展開（第5章1節:大学が行っている情報発信の分析）,2008,10 頁

６．研究組織
(1)研究代表者
齋藤　聖子(SAITO KIYOKO)
独立行政法人　大学評価・学位授与機構・准教授
研究者番号：90443283

(2)研究分担者

(3)連携研究者